

## 家族縮小時代が nLDK 住宅に求めるもの —子ども独立後の高齢者世帯を対象に—

### 【代表者】

小伊藤亜希子 大阪市立大学 生活科学研究科・教授

### 【共同研究者】

村田順子 和歌山大学 教育学部 教授

宮崎陽子 羽衣国際大学 人間生活学部 准教授

松尾麻里子 阪急阪神不動産株式会社 住宅事業本部住宅事業企画部

### 【研究概要（申請書より抜粋）】

現代日本の都市は、戦後のマスハウジング時代にモデル化された住宅で溢れている。それは、欧米住宅を模倣し、近代核家族の器として普及した公室と私室の分離を主軸とする、いわゆる nLDK 型住宅である。しかし人口減少時代となり、家族規模も縮小している現代においては、求められる住宅は大きく変化しストックとニーズのズレが拡大している。本研究は、子ども独立後に nLDK 型住宅に居住する高齢者世帯を対象に、住み方と住空間のズレを検証し、高齢者世帯の住要求を把握することを目的とする。

本研究が着目するのは、個々の世帯人数は小さくなっている一方で、親族を中心とする複数世帯が日常的に行き来しケアを提供しあうライフスタイルが広がっていることである。独立した子の子ども部屋や、子どもが置いていったモノが大きなスペースを占めている高齢者世帯住宅、毎日のように子世帯が来て大人数で食事をする、あるいは、近居する子どもたちに見守られて生活する高齢者など、その形は様々である。65 才以上高齢者の世帯構成では、三世代居住が急激に減少している一方で、親子世帯の近居が増加していることが知られている。今日の住宅計画は、直接居住する家族だけでなく、こうした非居住家族との関係をふまえることが求められている。

又、在宅時間が長くなった高齢夫婦における、それぞれのプライベートスペース要求にも着目する。